

## 2026 (R8) 年度 文学部国文学科 一般選抜 (中期) 講評

### (一) 現代文

#### 【出題意図】

問題文は北澤憲昭『アヴァンギャルド以後の工芸―「工芸的なもの」をもとめて』(美学出版、2003.4)に拠った。高村光太郎が1923年に制作した《手》を題材に、西洋近代の彫刻と日本の工芸作品との違いを論じた文章である。視覚が優位な近代芸術に対して、触覚によって他者と共生する身体のあり方を模索している現代アジアのアーティスト達の仕事にも通ずる可能性を《手》に見出す論理展開は明快で鮮やかである。本文の内容理解を測ることを中心に作問した。

#### 【採点のポイント】

問一 漢字の読み書き。文脈に即して正しく読めているか、書けているか。

問二 当該段落を中心に、近代の彫刻の性格と対比的な性質を表す熟語を記すこと。

問三 内容理解と説明の問題。傍線部を含む段落に続く2段落で説明されている内容を的確にまとめること。

問四 内容理解と説明の問題。「手づくり」という概念が現代アジアのアーティストたちのしごとを矮小化する危惧はどこにあるか、逆に彼らの仕事の本質はどこにあるのかを、前後の段落の文脈を踏まえてそれぞれ説明すること。

問五 内容理解と説明の問題。傍線部の前の部分で、手のはたらきを眼の支配と対比しながら説明している内容を踏まえ、それぞれが主体や身体とどう関わっているのかを理由として記述すること。

問六 内容理解と説明の問題。高村光太郎の《手》が西洋の近代芸術と異なり、ジャワ文化のカグナンと共通して持っている道徳的な意味合いについて、それが一つの国民性に閉ざされるものではないということと関連させながら説明すること。

#### 【講評】

問一 読みの問題の正答率は高かったものの、書き取り問題では字画の細部まで正確に書けるかどうかで差がついた。同音異義語との混同や一文字だけ別の同音の漢字と取り違えている答案も多く見られた。

問二 空所補充の問題である。文中から抜き出す問題ではなく、自分で考えた語句を挿入しなければならない。しかし、本文中の手がかりをきちんと読むという基本を押さえれば容易な問題である。直前の「みずからの外へと向かう」が空所を修飾することに気づき、前の文に「彫刻のような求心性をめざさない」とあることを手がかりにすればよい。

問三 記述式の問題で何を問われているのかを明確に認識できていない解答が多く見られた。何らかの事・物が具体的に何なのかが問われているのか(～ということ)、そうではなく、ある事柄が起きた理由やその原因(～だから)を記述するのか、設問の意図を明確に理解していない解答が多かった。今回は設問の要求に即した解答をするという基本的な事をおろそかにしている解答が目立った。

問四 「手づくり」という概念を解説するに留まらず、手仕事が発見することの意味を説明しなければなら

らない。職人的な手のはたらきは産業社会の現在では失われてしまったために価値があるのではなく、人間が世界と関与する根源的な行為と筆者は考える。「実相・本質を見失ってしまう」等の抽象的な答案が散見されたが、その具体的な内実の説明が必要である。

問五 傍線部は、A よりもむしろ B の方が、という構文であるので、手・触覚についてのみの解答では不十分であり、眼・視覚についての言及も必要である。「眼が世界を見抜くがゆえに」「世界に臨む主体的意識を優先するあまり」、身体や身体と世界の連関を失う視覚的な態度と、それとは異なる触覚の可能性を論じられるとよい。単純に直前の文や段落内のことばを抜き出すだけでつながりのない解答が散見された。眼→眠／発揮→発輝／触覚→触角といった単純な誤字も目立った。

問六 「それ」が指す内容が高村光太郎の手による《手》の塑造であること、それが西洋の近代芸術とも異なり、単なる日本回帰でもないことはよく理解されていた。《手》やカグナンの道徳性についての説明として「手の根源性」という語句の引用や「世界に織り込まれる」という比喩に留まったものは不十分である。「ナショナルリティの域を超える可能性」を「アートとしての可能性を拡大しつつある」で言い換えただけの答案も同様。他に「カナグン」「ガクナン」といった単純な誤字も目立った。

## (二) 古文

### 【出題意図】

『太平記』巻十五「賀茂神主改補の事」からの出題である。関連人物が多いため、問題文に示した人間関係をふまえて、主要人物の心情や行動を的確に読み解く力が必要となる。語意、敬語、文法、和歌に関する基礎理解を確認するとともに、二人の御子による三年越しの求愛の結末とその背景を適切に読み取れたかを問うた。なお、本文は新潮日本古典集成『太平記 二』に拠るが、理解を助けるために一部をあらためた。

### 【採点のポイント】

問一 基本的な古語の意味を文脈に即して解釈できているかを見た。

問二 尊敬表現について、人物の関係や行動、また文章の特徴を把握し、誰から誰への敬意かを的確に指摘することを求めた。

問三 A 全体を疑問または反語としてとらえているか（どちらでの訳出も可とした）、「分く方」の内容を適切に表しているか、助動詞「べき」の意味を適切に訳出しているかに注目した。C 全体の趣旨をとらえているか、「そぞろに」の意味をとらえられているか、「心あこがれ」を適切に訳出しているか、助動詞「ぬ」の意味を適切にとらえているかに注目した。

問四 それぞれ掛詞の箇所を適切に抜き出したうえで、何と何を掛けているかを適切に明示しているものに得点を与えた。

問五 本文中の表現をもとに、①誰の「御歌」に誰がどのような反応をしているか、②波線部の動作主体はその様子を見てどのように判断したか、③そのことが「そぞろに独り笑み」したこととどうつながるのか、主要登場人物の関係および当該部の状況を正確に把握して不足なく説明することを求めた。

### 【講評】

問一 基本的な古語について、その現代語訳を問うた。とりわけウの「あはれに」については、「悲しい気持ち」というように古語ではなく現代語の意味として理解しているものも多かったが多くは正答していた。古語の辞書的な意味を知識として知っておくことも重要であるが、古文を読むにあたっては、ただ辞書的な意味を一様にあてはめるだけではなく、前後の文脈を考慮して丁寧にその意味を理解しようとすることが重要である。

問二 ③は正答が多かった。一方で、①を誤って「父」からの敬意としたものも少なくなかった。注を参照しながら「なかだち」の発言を読み解くことが必要であった。

問三 A多くは疑問または反語で訳出できていた。「分く方」の「方」を、方法ではなく人を指すと誤解している答案が散見された。「はんべる」を含む会話文中であることをふまえた表現がよりよいであろう。C文脈から「娘」の心情は推し量れそうであるが、助動詞「ぬ」を完了・存続ではなく打消しとみて趣旨を誤ってとらえている答案が意外と多かった。波線部だけを見るのではなく、前後の文脈をしっかりとらえたうえで解釈を確定することが肝要であろう。

問四 掛詞の箇所を抜き出しているだけで、何と何を掛けているのかが具体的に示されていないものには点を与えなかった。同じ箇所に重ねられた複数の異なる語がそれぞれ何であるか明らかになるように、漢字を用いるなどして具体的に説明するのがよいであろう。「掛詞」を「縁語」と混同している答案が散見された。掛詞、縁語、枕詞、序詞、本歌取りなど和歌の修辞については、具体的な歌の例に即して理解を深めておきたい。

問五 くわしく説明せよ、と問題文にあったためか、波線部と直接かかわらない部分の内容を長々と記述するものが目についた。本文の内容と齟齬がなければ減点対象とまではしなかったが、求められる要点と無関係な部分に言及しても加点対象とはならない。採点ポイントで示したところについて、本文中の表現をふまえ、趣旨を的確にとらえ説明することが肝要である。また、娘が御子への「返歌」を詠じたとした答案が少なからずあったが、そうした内容は本文中に記されていない。正確な読解を心がけたい。主要人物にかかわる漢字の書き間違いについては減点対象とした。文学部国文学科を目指すのであれば、自らの言語表現についても一字一句に注意したいところである。

### (三) 漢文

#### 【出題意図】

今年度は明・王世貞『弇州山人四部稿』から出題した。王世貞（一五二六～一五九〇）は明代後期の文壇の領袖の一人で、復古主義を唱えた。問題文は「蘭相如完璧帰趙論」として『古文観止』にも収録される。総字数一四〇字程度で、おおむね例年並みの長さの文章。返り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、返り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基本的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

#### 【採点のポイント】

問一 漢文を読解する上で最も基本的かつ重要な語の読みについて問う問題。A「如」はここでは「しく」と読む。なお、「しくは」「しくこと」などでもよい。B「奈何」は「いかん」と読む語であるが、下に続く表現にかかって、それはどういうことか、どうしてか、と尋ねる用法であるから、正解は「いかんぞ」

「いかにして」など。C「終」は「つひに」。いずれも、送り仮名がついていないもの、不適切な答案および歴史的仮名遣いでない答案は減点した。

問二 書き下し文に従って返り点を正しく付けられるかをみる問題。返り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。今年は使役の助字についての理解を問う問題だった。完答のもののみ、点数を与えた。

問三 問題文の内容を的確に読解できているかを問う問題。外交に臨んでの秦の態度が不誠実であることを見抜き、璧を趙へとひそかに持ち帰らせた藺相如の行動は世間の人々から賞賛されているが、作者・王世貞はそれを批判している。璧をひそかに持ち帰るのではなく堂々と渡して交渉すべき、また、外交上の名分（「曲直」）へ目配りすべき、といった王世貞の主張が読み解けるかどうかの問題となる。

#### 【講評】

問一 Cはおおむねできていた一方、A、Bの正答率が予想よりも伸び悩んだ。

問二 おおむねできていた。ただし、返り点として一・二点を使うべきところに上・下点を使う誤答が少なからず見られた。基本的な事項についてしっかりと知識を定着させることを意識してほしい。

問三 答案の出来が大きく分かれた。本文中の「璧を棄」てるという表現に引っ張られて文字通り廃棄する意として理解した誤答、また、「給（いつは）」るという表現に引っ張られて偽物の璧を渡す、とした誤答が目立った。文中の一部の語のみに注意するのではなく、全体の主旨を把握することを意識してほしい。